

新約聖書の中の奥義 第17回

□この学び全体のアウトライン

第一部 イン트로ダクション

第二部 奥義としての神の国

第三部 教会に関する5つの奥義

第四部 イスラエルが頑なになることに関連する奥義

第五部 サタンの2つの奥義 と それを打ち破る神の8番目の奥義

□ 第五部「サタンの2つの奥義 と それを打ち破る神の8番目の奥義」アウトライン

A) サタンの奥義の第一 バビロンの奥義 黙17:1~18

B) サタンの奥義の第二 不法と不法の人の奥義 IIテサ2:1~12

C) 神の8番目の奥義 サタンの奥義を打ち破ること

D) 総括：終わった

本日は、17章1
~8節を学ぶ

□前回の内容

黙示録17章の位置づけは・・・

	区分		黙示録の箇所	
①	大患難期の前に天で起きる事		4~5章	
②	大患難期	7年間の全体の流れ	前半期	6~9章
③			中間で起きる事	10~14章
④			後半期	15~16章
⑤		7年間の中で特に重要な	バビロンの二つの役割	17~18章
⑥	ことをクローズアップ	メシアの再臨	19:1~19	
⑦	大患難期終了後に起きる事(王国の準備期間)		19:20~21 20:1~5	
⑧	メシアの王国【千年間】		20:6	
⑨	メシアの王国の後の出来事		20:7~15	
⑩	永遠の秩序【新しい天と新しい地】		21章~22:5	

サタンの奥義の第一 バビロンの奥義 黙 17:1~18 ①

1. バビロンの二つの役割、その第一は、世界統一宗教の本部所在地 17:1~6

(1) 17:1~2 (天使による宣言) また、七つの鉢を持つ七人の御使いの一人が来て、私に語りかけた。「ここに来なさい。大水の上に座している大淫婦に対するさばきを見せましょう。地の王たちは、この女と淫らなことを行い、地に住む人々は、この女の淫行のぶどう酒に酔いました。」

- ① 天使が、使徒ヨハネに対して語りかけて、「~を見せましょう」と宣言する。6章から16章までで、大患難期7年間の全体的な流れが啓示された。17章からは、大患難期の中で特に重要なことが2つ啓示される。その一つ目が、大きな都市、バビロンが大患難期においてどのような役割を担うのか、という啓示である。バビロンには、「大淫婦」という表現があげられている。
- ② 「淫婦」という表現は古めかしい。現代用語で言えば、「売春婦」である。しかし、ギリシア語の原語の意味は、【あることを本来の正しい方法によらないで誤用すること】を指す。そしてそれが、性行為であれば、結婚による夫婦関係の中でなされるのであればそれは正しいことであるが、そうでないなら、淫らなことをする、となる。
- ③ ここに登場する「大淫婦」は、人の性行為ではなく、宗教と関係する。宗教を正しく用いるなら、それは「孤児ややもめたちが困っているときに世話をする」(ヤコブ1:27)ことである。真の宗教は、しもべとして人に仕える役割を果たすものである。
- ④ しかし、宗教が誤用されると、しもべとしてではなく、主人としての立ち位置に立とうとする。人に仕えるのではなく、人を支配しようとする。これが黙示録17章に登場する「大淫婦」の本質である。それは偽の宗教組織である。
- ⑤ 旧約聖書では、偶像崇拜は、霊的な淫行、霊的な姦淫であると見られた(ホセ1~3章、エレ2:20、3:1~9、エゼ16:15~41、23:5~44)。偽の宗教組織では、最高指導者を「神の代理人」あるいは「間違ふことのない人(無謬性)」として崇めるであろう。これは人間を偶像化するものである。
- ⑥ この大淫婦は、1節、「大水の上に座している」とある。この点については、次回17章15節のところでも説明するが、「大水」や「海」は、異邦人世界を象徴する表現である。よって、【世界の人々の上に座す】、すなわち世界の人々を支配する、という意味である。
- ⑦ 【1節のまとめ】使徒ヨハネが見た「大淫婦」とは、偽の宗教組織である世界統一宗教の本部が置かれた都市、バビロンである。真の宗教なら人に仕え、しもべとしての立ち位置につく。しかし、世界統一宗教は人を支配し、権威をふりかざす。
- ⑧ 2節は、世界の統治者たちがバビロンと手を結んでいる状態を示す。その結果、政治も宗教も共に腐敗し、それぞれ本来の正しい働きがなされない。

(2) 17:3~6 (大淫婦に関する啓示) それから、御使いは私を御霊によって荒野へ連れて行った。私は、一人の女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神を冒瀆する名で満ちていて、七つの頭と十本の角を持っていた。その女は紫と緋色の衣をまとい、金と宝石と真珠で身を飾り、忌まわしいものと、自らの淫行の汚れで満ちた金の杯を手を持っていた。その額には、**意味の秘められた**名、「大バビロン、淫婦たちと地上の忌まわしいものの母」という名が記されていた。私は、この女が聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っているのを見た。私はこの女を見て、非常に驚いた。

- ① 大患難期に入る時点では、世界は10の地域に分割され、10人の王たちがそれぞれの統治地域を支配統治している。この統治形態は大患難期に入る前から始まっていて、大患難期の前半期いっぱいまで続く。「十本の角」は10人の王たちを指す。
- ② 3節、大淫婦は、十本の角をもつ緋色の獣に乗っている。十本の角を持つ獣は複数いるわけではなく、一体である。10の地域に分割統治されているとはいえ、全体としては、一つの「世界統治機構」と呼ぶべきものである。世界統治機構は、大淫婦すなわち、世界統一宗教の本部が置かれた都市バビロンを、自分の上に乗せている。乗せるとは、支持するという意味である。【まとめ】世界統一宗教の都バビロンは、世界統治機構の支持を得て、全世界の人々を宗教面で支配する。
- ③ 3節「緋色の獣」・・・ダニエル書では「獣」は、世界的な覇権国家を象徴する。第一の獣はバビロニア、第二の獣はメディア・ペルシア、第三の獣はギリシア、そして第四の獣は、ローマとその後の国際社会である。現在に至るまで第四の獣は続いており、大患難期の最後まで続く。緋色の獣は、ダニエル書の第四の獣である。
 - なぜ「緋色」なのか・・・黙示録12:3には、サタンの外観が次のように記されている。「見よ、炎のように赤い大きな竜、それは七つの頭と十本の角を持ち、その頭に七つの王冠をかぶっていた。」緋色の獣は、赤い竜、サタンが地上で自身の邪悪な知恵とパワーを現わすための統治システムである。
 - 普遍的教会がキリストのみからだであり、それは真の信者たちで構成される。これに対し、緋色の獣はサタンのからだであり、それは神よりも富や快樂、人からの称賛を愛する人々で構成される。
- ④ 3節「その獣は神を冒瀆する名で満ちていて」・・・原文には「その獣は」の記述はない。「**女は**神を冒瀆する名で満ちていて」とも読める。女は偽の宗教組織、世界統一宗教の本部が置かれた都バビロンであるから、まさに神を冒瀆する名で満ちているであろう。
- ⑤ 3節「七つの頭と十本の角を持っていた」・・・獣は十本の角を持っている。それは、①のとおり、この時点で世界を統治する10人の王を指す。七つの頭については、次回、17章9節の解説において説明する。

- ⑥ 4節、使徒ヨハネは、女の外觀について記している。富んでいて絢爛華麗、しかし同時に、靈的な淫行で汚れている。
- ⑦ 5節、使徒ヨハネは、ここで、奥義を明らかにする。下線部「意味の秘められた」のギリシア語は、「奥義」である。その女の名は、奥義である。どういう名か、それは「大バビロン、淫婦たちと地上の忌まわしいものの母」。
- バビロンは、人類史上、偶像崇拜が始まった場所である。旧約聖書では、偶像を拝むことは、靈的な淫行として表現される。
 - 創世記 10：8～12・・・8～10節、バビロンの創設者はニムロデ。ユーフラテス川の流域、シナルの地と呼ばれる地域にバビロンという都市を建設し、バビロニア王国の発祥となった。11～12節では、ニムロデはバビロニアを去って、ティグリス川流域のアッシリア方面に移動し、そこにニネベという都市を建設した。ニムロデがなぜ移住したのかはここに書かれていないが、その理由は創世記 11章の記事の中にある。
 - 創世記 11：1～9 バベルの塔の記事である。ヘブル語でバビロンは、バベルである。バベルの塔、そしてバビロンの町自体、その建設目的は、占星術のためである。偶像崇拜と占星術は密接な関係があった。よって、バビロンは、黙示録では、「淫婦たちと地上の忌まわしいものの母」と呼ばれる。バビロンの町に集まってバベルの塔を建設した人類は、それまで「一つの話しことば」、「一つの共通のことば」であった。神はそれを多様な言語にした。そのため、バビロンに集結していた人類は、「地の全面に散らされた」（創 11：9）
 - かくして、ニムロデもバビロンを去らざるを得なかった。彼はアッシリア地方でニネベという新たな町を建設し、アッシリア王国の発祥となった。
 - 後年、北イスラエルはアッシリア捕囚、南ユダはバビロン捕囚となる。
- ⑧ 6節、使徒ヨハネは、「私は、この女が聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っているのを見た。私はこの女を見て、非常に驚いた。」と記している。
- 世界統一宗教は、大患難期の前半期において、イエスをメシアとして信じる信者たちを迫害する。そのため、多くの信者たちが殉教の死を遂げる。
 - 黙 6：9～11の「神のことばと、自分たちが立てた証しのゆえに殺された者たちのたましいが、祭壇の下にいるのを見た」。ここに記されている殉教者たちは、大患難期前半で世界統一宗教によって迫害された人々である。

女=都市としてのバビロン=世界統一宗教の本部所在地

2. 中間期においてバビロンは、第二の役割、反キリストによる世界統治の首都へと移行する 17:7~8

(1) 17:7a すると、御使いは私に言った。「なぜ驚くのですか。私は、この女の秘められた意味 (=奥義) を、あなたに話しましょう・

① 文脈の確認・・・17:6までで語られたこと・・・大患難期前半期、バビロンは、世界統一宗教がそこに本部を置き、全世界の宗教界を支配する。

- 大患難期の前期は、同時に14万4千人のユダヤ人伝道者たちが全世界で宣教活動を展開する。そこで多くの異邦人が、イエスをメシアと信じる。世界統一宗教は、メシアを信じる真の信者たちを迫害する。そのため、多くの殉教者が出る。(黙7:1~17)

② 女を見て驚いた使徒ヨハネに、天使は、この女の奥義を伝える。

(2) 17:7b この女を乗せている、七つの頭と十本の角を持つ獣の秘められた意味 (=奥義) を、あなたに話しましょう。

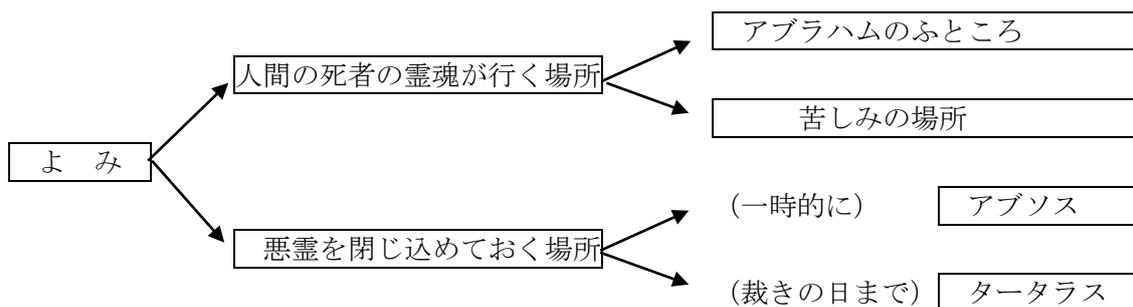
① 7aの「この女の奥義」とは、7bの「七つの頭と十本の角を持つ獣の奥義」でもある。バビロンは、大患難期の後半期では、「獣」による世界統治の首都となるからである。

② 黙示録のこの箇所を読むときに、注意しなければならないポイントを確認

- 女は、都市バビロンを象徴する。「大淫婦」(1節)と呼ばれるのは、大患難期前半においては、世界統一宗教の本部が置かれ、後半においては、自らを神と称し、自分の偶像も設置する反キリストの王座が置かれるためである。
- 獣は、世界的な覇権国家を象徴する。聖書では、歴史上エルサレムを支配する覇権国家が4つ、登場する。バビロニア、ペルシア、ギリシア、そして第四の国(ローマ帝国から現代国際社会に至る)である。
- 第四の国の最終段階(完成)は、反キリストによる世界支配である。その時期は、大患難期の後半期3年半である。この時期においては、「獣」=反キリストである。
- よって、17章7~18節で語られる「獣」は、反キリストを指す。
- 反キリストが世界を支配する後半期において、反キリストが首都とする都市は、バビロンである。反キリストは、世界統一宗教の本部を破壊し(17章16節)、バビロンを自分の都とする。よって、バビロンは「地の王たちを支配する大きな都」(17:18)となる。

(3) 17:8 あなたが見た獣は、昔はいたが、今はいません。やがて底知れぬ所から上って来ますが、滅びることになります。地に住む者たちで、世界の基が据えられたときからののちの書に名が書き記されていない者たちは、その獣が昔はいたが今はおらず、やがて現れるのを見て驚くでしょう。

- ① 下線部「昔はいたが、今はいません」、「昔はいたが今はおらず、やがて現れる」・・・原文には「昔」「今」という単語はない。動詞の過去形、現在形、未来形が使われていて、「いた、いない、いるであろう」という表現。【一度死んで、今はいないが、やがてよみがえる】という意味。
- ② 6節までは、「緋色の獣」は、10人の王による世界分割統治をする世界統治機構であるが、7節以降では、獣は、反キリストを指す。
 - 獣は7つの頭(=7つの発展段階)を持っていて、反キリストはその最後の7番目の頭である。詳しくは、次回17章9節にて解説する。
- ③ 「底知れぬ所」：ギリシア語でアブソス、英語読みではアビス
 - 死者の霊魂が行く先は「よみ」・・・ヘシェオール、ギハデス
 - よみには、人間の死者の霊魂が行く場所と、墮天使=悪霊を閉じ込めておく場所とがある。
 - 人間の死者の霊魂が行く場所は、さらに二つに分かれる(ルカ16:19~31)。
 - 「苦しみ場所」(ルカ16:28) = 不信者の霊魂が行く場所
 - 「アブラハムのふところ」(ルカ16:22) またはパラダイス(ルカ23:43) = 旧約時代に信者の霊魂が行った場所。メシアが十字架上で死んだ後、メシアの霊魂もここに行った(ルカ23:43)。
 - メシアが復活・昇天したときに、旧約時代の信者たちの霊魂は、メシアと共に天に引き上げられた(エペソ4:8)。「アブラハムのふところ」には、今は誰もいない。
 - メシアの復活・昇天以降は、パラダイスは、天にある(Ⅱコリ12:4)。
 - 悪霊を閉じ込めておく場所は、さらに二つに分かれる。
 - 「アブソス」(ルカ8:31、黙9:1、11) = 悪霊を一時的に閉じ込めておき、解放する予定のある場所
 - 「タータラス」(Ⅱペテロ2:5、ユダ6) = 悪霊を裁きの日まで閉じ込めておき、解放することのない場所



- ④ 反キリストは、大患難期の間で、一度死んでアブソスに下る。そして、よみがえって、10人の王のうちの3人を倒し(ダニ7:24)、さらにエルサレムで活動していた二人の証人を倒す(黙12:7)。世界中の人々は驚き、彼を支配者として認めるようになる(黙13:3~4)。
- 反キリストの靈魂が、人間の死者の靈魂が行く場所ではなく、悪霊が閉じ込められる場所に行くということは、何を意味するか。反キリストは、通常の間人ではないということである。
 - 反キリストは、人間の女とサタンとの雑婚によって生まれるであろう。
 - 反キリストは、創世記3:15では、「おまえの子孫(=サタンの子孫)」と呼ばれている。
- ⑤ 8節 反キリストのよみがえりを見ても驚かず、反キリストを拝まない人々がいる。彼らは「世界の基が据えられたときからのちの書に名が書き記されている者たち」、すなわちイエスをメシアとして信じる信者たちである。
- 彼らは、黙示録の預言をあらかじめ教えられ、それを信じていたので、反キリストが一度死んでよみがえることも想定内である。
 - ここでいう「いのちの書」とは、「子羊のいのちの書」(黙13:8、21:27)のこと。信者となるように選ばれた人の名が、世界の基が据えられたときからすでに書かれている書物。
 - 【補足】「いのちの書」という別の書物がある(黙20:12、15)。これは、人が肉体のいのちを受けたときにその人の名が記され(詩139:16)、信者にならずに死ぬと、そこから名前が消される(詩69:28a)
- ⑥ 【補足】 反キリストは、大患難期の末期にもう一度死ぬ(Ⅱテサ2:8)。彼の靈魂は、今度はアブソスではなく、人間の死者の靈魂が行く場所である「苦しみの場所」へ行く(イザ14:3~11)。そして、復活させられて、生きたまま火の池に送られる(黙19:20)。
- 復活には、「第一の復活」(黙20:5)と『第二の復活』がある。キリストは「復活の初穂」(Ⅰコリ15:20~23)であるが、これは「第一の復活」の初穂である。
 - 第二の復活は、不信者の復活である(ヨハネ5:28~29、黙20:12)。この復活は、火の池(=ゲヘナ)に送られるための復活である(黙20:14~15、マタイ10:28)。火の池に行く最初の者は、反キリストである。彼は、その意味で、『第二の復活』の初穂である。
 - 火の池は、黙20:10「昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける」場所であり、神から永遠に分離される場所である。これを「第二の死」(黙20:14)と呼ぶ。
 - 第二の死は、信者には何の力も持っていない。信者は第一の復活にあずかる幸いな者だからである(黙20:6)。